

現代日本の文芸関係者のもつ図書館観の一断面・続

——『図書館の学校』巻頭エッセイの分析Ⅱ 図書館はどうみられてきたか・6——

佐藤 毅彦

Images of the Library (6)

How Have Japanese Writers Depicted Libraries?

——Analysis of Essays Carried by the Magazine *Library School*——

SATO Takehiko

Abstract: This paper examines how libraries are seen by Japanese writers in the magazine *Library School*, continuing the study of last year. The people who are critical of the present condition are concerned about the materials selected by libraries. On the other hand, there are people who believe that public libraries are being used in various affirmative ways. WATAYA Lisa has talked in an interview about the use of the library. Shouldn't the public library make good use of this fact as an advertisement for itself?

要約: 前年に続き、雑誌『図書館の学校』に掲載された文芸関係者のエッセイを分析し、彼らの「図書館観」を明らかにしようと試みた。図書館の資料選択の現状について、批判的な見方をしている人たちも存在する。一方、現実の公共図書館には、多様な利用者がさまざまな目的で訪れるようになってきているが、そうした利用状況をむしろ肯定的にとらえる見解も、今回のエッセイの中には含まれている。現実「芥川賞」作家の「綿矢りさ」は、図書館を利用していることをインタビューで答えており、こうした実例を、図書館のがわでも、なんらかの形で活用していくことが必要なのではないか。

1. はじめに

——話題の「芥川賞」作家「綿矢りさ」と図書館のこと、など

第130回、2003年度下半期の「芥川賞」は、20歳前後の二人の若い女性作家が受賞したことで大きな話題となった¹⁾。その受賞者の一人が、『蹴りたい背中』の著者、綿矢りさ（1984年生まれ）である²⁾。

綿矢りさは、京都市内の高校在学中、『インストール』により、史上最年少の17歳で、第38回、2001年度「文藝賞」を受賞しているが³⁾、その後に、雑誌『図書館の学校』に掲載されたインタビューで「図書館って使ってますか?」「はい。図書館しか使っていないと言ってもいいくらいです。本を本屋で買ったり

はあまりしないので」「あ、そうなんですか。ベンキョウに使うだけじゃなくて、読書も図書館の本で?」「はい」と語っており、インタビュアーが図書館の座席を利用する「席借り」的なものを想定して発言しているのに対して、作家本人は、図書館の資料も大いに利用していると回答している⁴⁾。

また、『文學界』に掲載された「著者インタビュー」でも「高校の図書室で太宰治や三島由紀夫、そして村上春樹や山田詠美などを次々と読み進めるうちに、自然と小説を書きはじめた。『小説は好きな作家の好きな作家をたどって芋づる式に読んでいます。例えば村上春樹の好きな作家であるフィッツジェラルドを読んだり。そうすると、はずれがないんです。英文系のクラスにいるんですが、うちのクラスは変わってて、昼休みに図書室に通いつめてても、ほっといてくれ

る』と述べている⁵⁾。

さらに、『WEB本の雑誌』に発表されたインタビューの中でも「最近図書館で選ぶことが多いです。図書館に行って、そこで話題になっている本とか、友達の情報とかをもとに選んで読みます。そこで気に入った作家があると、その人のものをどんどん読む。特に気に入ったものは本屋さんで買うんです」「一ヶ月のお小遣いが5000円しかない」から「本に使えるお金は、えーと、マンガも合わせて2000円くらい」で、「すごく厳選して、絶対ハズレのないものを買います。それに、読んで気に入った本は手元に置きたくなる、という気持ちもありますね。そして買ったからには何度も何度も読む」「京都市の図書館もよく行きますけど、高校の図書室が一番好き。新刊もよく入るし、選びやすいし。自分の本が置いてあるのはちょっと恥ずかしいですけど」と語っている⁶⁾。

これらはいずれも高校時代、京都在住であった頃のことと考えられるが、2003年10月の『新刊展望』に掲載された「読書日記」には「八月九日 夏休みのせいか、図書館では新刊の本はどれも貸し出し中。しょうがないから料理の本を借りようと思い、検索機械で『りょうり』を検索したら、機械が止まって動かなくなった。図書館員に助けを求めると、『料理だと引かかる本の件数が多くて、全部拾ってくるのにすごく時間がかかってしまうんですよ。』と言われた。図書館員も後ろで順番を待ってる人達も困り顔。謝りたかったけど、謝れなくて、ふうんという態度で画面を見ているだけだった自分に腹が立つ」「結局本は一冊も借りずに図書館を出た」とある⁷⁾。これが、どこの図書館での出来事かは明示されていないが、同じ日の記述に「実家に帰りたいなと思った」という部分があり、早稲田大学に進学して首都圏に居住している時期にも、図書館を利用していることをうかがわせる記述がみられるということになる。

このような図書館との関係についての記述が、近年刊行された文芸関係者のエッセイに収録されているケースは他にもある。『プラナリア』で第124回、2000年度下半期の「直木賞」を受賞した山本文緒(1962年生まれ)が、2004年4月に刊行した『日々は作文』には、次のようなエピソードが載っている。「私は図書館が好きだ。図書館も土日の子供や学生がうじゃうじゃいてうるさかったりもするけれど、幸い私は平日の午前中なんかに図書館に行ける身なので、ものすごく幸福である」「ちょっと前まで私は川崎に住んでいて、よく利用していた川崎市立T図書館は、すごく

好きな図書館だった」「今は横浜市に引っ越してきたので、近所の横浜市立M図書館に通っている。M図書館もいい図書館だ」としている。また「書店に新刊がばんばん並んでいるのと対照的に、図書館には古い本がしんと並んでいる。図書館に新刊がないわけではない。人気のある新刊なんかは常に貸出中で、順番待ちなのである。宮部みゆきなんか棚で見かけたこと一度もありませんもの」のように、最近の図書館状況について、実態をふまえた記述も含まれている⁸⁾。

また、文芸評論家で、翻訳の著作も多数ある高橋英夫(1930年生まれ)が、2004年5月に刊行した『本の引越し』には、「図書館とのつきあい」というタイトルの一文が掲載されている。「中学の図書館は柔道場の二階」にあり、「あまり自由に利用できないようになっていた。木の柵があって、奥の書棚に行つてはいけないらしかった」ことや「高校、大学となれば、学校図書館とのつき合いは前よりも密になった」ことが述べられている。「大学を出てからは、図書館とはさして縁がなかったが、現在はひんぱんに利用している。私の家のまわりに、それぞれ自転車で十三分から二十分ぐらいの距離で七つの図書館がある。練馬区立が二つ、豊島区立が二つ、板橋が一つ、中野が一つ。各館によって蔵書が異なり、貸出方式も異なるが、いま私の書斎には七館から借出した本が十六冊おいてある」という状況が紹介されている⁹⁾。

さらに、第8回現代詩手帖賞(1967年度)、『プラトンの恋愛』で第7回泉鏡花賞(1979年度)などの受賞歴のある、金井美恵子(1947年生まれ)が2004年6月に出版した『目白雑録(ひびのあれこれ)』では、自身が図書館を利用することはなくても、公貸権をめぐる論議について、『「タダ」だからこそ、それでも読んでいただいてもらえることを有難いと思ったほうがいいんじゃないの』と、文藝家協会の三田誠広に代表される見解に対して否定的な意見が表明されている。

こうした例のように、世代にかかわらず、図書館を実際に利用している作家の見解や、図書館に関する意見が、最近出版されたエッセイの中に描かれているケースが存在しているのである。

2. 雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析Ⅱ

雑誌『図書館の学校』には、ある時期まで、巻頭に文芸関係者によるエッセイが掲載されていた。同一の雑誌に、集中的に掲載されたエッセイを分析すること

により、文芸関係者の“図書館観”の一断面を明らかにしようと試みた前年の分析では、『図書館の学校』巻頭エッセイのうち、2001年4月号までに掲載されたものを対象とした。今回は、それにつづいて、「誌面を大幅にリニューアルする」以前の2003年3月号までに掲載された文章をとりあげ、図書館が現代文芸関係者にどう「みられて」いるのかについての分析を試みた。これに加えて、表紙裏のページに掲載された文章についても、文芸関係者ものを、分析対象とした。

2-1 分析対象

今回とりあげたものは、次の通り。なお、全体の文字数は、(一行の文字数)×(行数)の概算による。

左から、整理番号(前年分01~32のつづき)、掲載年月、作家名、生年、タイトル、全体の文字数(百の位以下は切り捨て)、の順。

- | | | | |
|------------|--|-------------|--|
| 33.2001.5 | 瀬名秀明 1968 「未来の『博士』たちの図書館」約 3,500 字 ¹¹⁾ | 47.2002.3 | 笙野頼子 1956 「小説・S 倉極楽図書館」約 4,000 字 ¹⁵⁾ |
| 34.2001.5 | 宮沢章夫 1956 「魔物と旅に出る」約 4,100 字 ¹²⁾ | 48.2002.4 | 堀江敏幸 1964 「此处に井戸水と葡萄酒があるよ」約 3,800 字 ¹⁶⁾ |
| 35.2001.6 | 加藤郁乎 1929 「図書館への謝意」約 3,300 字 ¹³⁾ | 49.2003.4 | 浜田和幸 1953 「世界のヒーローたちと出会った米議会図書館」約 3,100 字 ¹⁷⁾ |
| 36.2001.7 | 青柳いづみこ 1950 「図書館で見たドビュッシーの素顔」約 3,300 字 ¹⁴⁾ | 50.2002.5 | 鐸木能光 1955 「図書館が『本』の呪縛から解かれるとき」約 4,800 字 ¹⁸⁾ |
| 37.2001.7 | 長澤 均 1956 「パソコンマニュアルよりもパソコン考古学を」約 1,300 字 ¹⁵⁾ | 51.2002.6 | 平出 隆 1950 「わたくし図書館」約 3,600 字 ¹⁹⁾ |
| 38.2001.8 | 荻野アンナ 1956 「三つの対話」約 3,100 字 ¹⁶⁾ | 52.2002.7 | 片岡直子 1961 「水曜日の図書館」約 3,300 字 ²⁰⁾ |
| 39.2001.9 | 柳父 章 1928 「図書館の思い出」約 3,600 字 ¹⁷⁾ | 53.2002.8 | 黒川 創 1961 「利用者への『壁』にならないカウンターを」約 3,800 字 ²¹⁾ |
| 40.2001.10 | 吉田直哉 1931 「もう少しオーラを」約 3,400 字 ¹⁸⁾ | 54.2002.8 | 中上 紀 1971 「生きる糧が詰まった空間」約 3,200 字 ²²⁾ |
| 41.2001.11 | 目取真俊 1960 「原点としての場所」約 3,300 字 ¹⁹⁾ | 55.2002.9 | 松山 巖 1945 「本たちの日常」約 3,500 字 ²³⁾ |
| 42.2001.11 | 草森紳一 1938 「『規則の寛大さ』について」約 3,400 字 ²⁰⁾ | 56.2002.10 | 室井光広 1955 「〈本番〉の日々」約 3,500 字 ²⁴⁾ |
| 43.2001.12 | 鳴海 風 1953 「サラリーマン作家の図書館利用法」約 3,500 字 ²¹⁾ | 57.2002.11 | 林あまり 1963 「びくびく」約 3,300 字 ²⁵⁾ |
| 44.2002.1 | 吉田秀和 1913 「図書館をめぐる三つのエピソード」約 3,700 字 ²²⁾ | 58.2002.11 | 菅 浩江 1963 「図書館という砦」約 3,800 字 ²⁶⁾ |
| 45.2002.2 | 佐野真一 1947 「出版と図書館」(講演)約 17,000 字 ²³⁾ | 59.2002.12 | 久世光彦 1935 「〈知〉の図書館」約 3,000 字 ²⁷⁾ |
| 46.2002.3 | 米原万里 1950 「ドラゴン・アレクサンドラの尋問」約 3,400 字 ²⁴⁾ | 60.2002.12 | 野中 柊 1946 「自由の天地へのステーション」約 3,300 字 ²⁸⁾ |
| | | 61.2003.1 | 三木 卓 1935 「学校図書館とわたし」約 4,000 字 ²⁹⁾ |
| | | 62.2003.1 | 白石公子 1960 「背文字のポエジーとトイレと」約 3,200 字 ³⁰⁾ |
| | | 63.2003.2 | 柴田元幸 1954 「幻想の図書館・現実の図書館」約 3,300 字 ³¹⁾ |
| | | 64.2003.2 | 中井久夫 1934 「図書館に馴染まざるの記」約 3,300 字 ³²⁾ |
| | | 65.2003.3 | 日垣 隆 1958 「原稿料と印税の話」約 4,600 字 ³³⁾ |
| | | | 雑誌『図書館の学校』表紙 (cover) 裏の文章は、図書館関連業界の人物が書いているケースもあるが、ここでは、文芸関係者のもののみをとりあげた(生年の右に、このページに表記されている肩書きをカッコ内に示す)。これらのエッセイは、スペースが表紙裏の1ページに限られているため、文字数は、すべて1,000字程度である。 |
| | | c 01.2000.7 | 常盤新平 1931 (作家) 「ある図書館」 ³⁴⁾ |

- c 02.2000.8 司 修 1936 (画家・作家)「アトリエと本箱」³⁵⁾
- c 03.2000.9 泉 麻人 1956 (コラムニスト)「永田町のタイムマシーン」³⁶⁾
- c 04.2000.10 町田 康 1962 (作家)「おくての俺」³⁷⁾
- c 05.2000.11 柳瀬尚紀 1943 (英文学者)「インターネット図書館」³⁸⁾
- c 06.2000.12 天沢退二郎 1936 (詩人)「図書館って本当は何する所?」³⁹⁾
- c 07.2001.3 多和田葉子 1960 (作家)「夜の図書館の顔」⁴⁰⁾
- c 08.2001.4 陣野俊史 1961 (批評家)「街の図書館の音源」⁴¹⁾
- c 09.2001.5 金井美恵子 1947 (作家)「発見の場として」⁴²⁾
- c 10.2001.9 佐藤洋二郎 1949 (作家)「夏の約束」⁴³⁾
- c 11.2001.10 海野 弘 1939 (作家)「リーディング・ビトウィーン・ザ・ライアンズ」⁴⁴⁾
- c 12.2001.12 多田智満子 1930 (詩人)「大学図書館にて」⁴⁵⁾

(この後、本論文中でそれぞれのエッセイを取り上げる際には、整理番号、作家名、生年、を示す)

2-2 エッセイの概要

それぞれの内容について、図書館と関連のある部分を中心に要約すると、以下のようになる。

33. 瀬名 1968「未来の『博士』たちの図書館」

「子供の頃、私にとって図書館とは完全に小説の本を借りるところだった。週末になるとバスに乗って市立図書館へ行き、ミステリーや怪奇小説を片端から借りて読んだ」という。大学でも「附属図書館はもっぱら試験勉強のための机代わり」で「『図書館は調べものに使える』ということを知ったのは、恥ずかしい話だが大学も四年生になって研究室に配属されてからのこと」であったが、「以来、図書館は私にとって、もっぱら文献検索や資料収集の場になっている」。テレビ番組の収録のため、母校の小学校で授業をした際、「図書室には子供向けの図鑑が常備されていたが、それらは子供たちの好奇心を満足させてくれない」。「コンピュータ室のパソコンはキッズヤフーがデフォルトで立ち上がるようになっていた」が、実際に使ってみると、検索に制限がかかっているため、ヒットしないことがあった。「本当に知りたいと思ったとき、人間は好奇心を止めることはできない」「そのとき私たちが真に必要なとするのは、優れた資料と検索システムで

ある」。「専門資料は専門家のためだけにあるのではない」「未来の『博士』たちのために、また創作を志す者たちのために、図書館はもっともっと門戸を開いてほしい」という。

34. 宮沢 1956「魔物と旅に出る」

「これまでに書いた戯曲のなかに、何度か図書館を登場させたことがある」という。「『図書館には魔物が住んでいます』登場人物の誰かがそんなふう口にした。ほんとはそんなはずはなく、いま利用しているたいていの図書館が明るくて清潔できちんと棚が整理されているが、劇のイメージの世界では、うす暗くて、じめじめし、かびやほこりの匂い、インクの香り、見てはいけない世界を感じさせる書名がそこにはあって、書名だけでもどきどきするのに、ページを開いたらとんでもないことが起きるのではないかという夢のような場所だった。それは私の期待であり、夢であり、私の書く図書館はいつだってそんなふう舞台に出現した」と述べ、さらに「白いひげを生やした年長いた司書」が登場する架空のストーリーをつづっている。

35. 加藤 1929「図書館への謝意」

「図書館らしいところに足を向けるようになるのは戦後三年目、大学の理科系から文科系に移って間もないころ演劇博物館に」入ったのがはじまりであり、「占領軍の言論検閲」があったところで、閲覧室には学生はほとんどいなかった。ここで演劇関係の雑誌などを読んだことに続けて、森銑三が早稲田で「書誌学の講座」を担当するようになって大学図書館の書庫を自由に利用できるようになったことにより「古い雑誌から」という「近代文学研究の上で例がない」書を刊行したことを紹介している。最後に「生涯こよなく図書館を愛された柴田宵曲居士」の句「図書館の卓に新たな夏帽子」を紹介している。

36. 青柳 1950「図書館で見たドビュッシーの素顔」

図書館でコンサートを聞いたこともあるが、「私自身はあまり図書館には足を運ばない。理由は、沢山並んだ本をみると頭が痛くなるからである。これは本屋さんでも同じ」であり、「書名や著者名、テーマなどで検索しなければならない。読書に関しては徹底的に受け身の私にとって、これはとても憂鬱な作業」であるという。それでも「家のすぐそばの杉並区立中央図書館のフランス文学のコーナーだけは、どんなに長い時間眺めていても、少しも頭が痛くならない。この図書館は蔵書が多く、サービスも充実しているので知られて」おり、「本のことなら何でもご存じの T さんと

いう名物司書の方が」いるとしている。また「ドビュッシーの博士論文を書くときは、ある財団の奨学金をいただいてフランスに行き、資料研究のためにパリの国立図書館に半年通った」として、この図書館を利用したときの具体的な閲覧手続きや、館内の閲覧室の様子を紹介している。

37. 長澤 1956 「パソコンマニュアルよりもパソコン考古学を」

「日頃、図書館を利用することは、滅多にない。記憶すべき箇所に線を引かないと憶えられない、というのと、装丁・造本を含めてフェティッシュに本を愛するところもあって所有せずにはいられなかったからだ。それでも必要に応じて国会図書館などは利用してきた」という。著作の執筆に際し、「パーソナル・コンピュータの歴史や文化史に関するもの」を図書館で調べたが、マニュアル本しかなかった。「マニュアル本なんてヴァージョンが古くなれば、何の価値もない。しかもコンピュータを買うお金のある人間ならマニュアル本ぐらい当然自分で買えるだろう。まったく無意味な投資、利用者へのおもねりとしか思えず唾然とするしかなかった」と感じている。「僕は図書館とはあらゆる文化に関する一種『考古学』的な発掘の場だと思っている。そこで昔、お金がなくて買えなかった本や旧刊新刊問わず、出会いそびれた本と出合う場だと思っている」とし、「司書の方々は何が『歴史』に組み込まれるか考慮して購入すべきだと思う」「インターネットでいくらでも情報が入手できる現在、図書館は、もっと特化された特殊な文化の場であってもいいと思う。それが平準化された市区町村立の図書館の多様化にもつながるのではないだろうか」と述べている。

38. 荻野 1956 「三つの対話」

「大学勤務とモノカキと、二足のワラジ」を「辞められない訳のひとつは、学内の図書館である」という。「昨夏は満州引き揚げ者の体験を小説に盛り込む際に、生の証言を補う資料のありがたさが身に染みた」。「キャンパスの中央には、地上五階、地下五階の『情報センター』が屹立しており、そこでの資料収集の様子について、具体的に紹介している（注：著者は慶應義塾大学文学部助教授）。

39. 柳父 1928 「図書館の思い出」

「私の少年時代、図書館とは、かくれてこっそり行く所、恥ずかしい場所」で「子供は一般に図書館に行くことは、勧められて」おらず、「父親は、私の読書好きを咎める様子だったし、とくに小説を読むことは

悪いこと、と叱られた」という。渋谷区の小学校の地下に図書館があり「放課後、区の職員が一人やってきて書庫の鍵を開け、出納係りの椅子に座ると始まり」だった。その後、訳語の研究を始めると「図書館は私にとってもっとも大事な仕事部屋になった」。研究が「言葉の歴史を調べることから始める」ので、国内に何冊もない書物が中心になり「図書館に探しに」行く。「資料は図書館に任せる、というような悟りができていた」。利用したのは「都内の大学図書館、国会図書館、都の公共図書館や、各種の専門図書館」で、「評論家とか研究者として、本と付き合うことになり、図書館や読書との関係が変わってきた。

40. 吉田直哉 1931 「もう少しオーラを」

「ウィーンの前ハプスブルク家の宮廷図書館、現在の国立図書館」に撮影に行ったとき、「三百万冊という蔵書のなかの逸品が」書架に並び、「背表紙を眺めながら巡回していくうち、感動を通り越して気が遠くなるのおぼえた」。「白髭をたくわえた老司書が得意満面、鼻をうごめかしながら秘蔵本を運んでくる」状況や、撮影した本について、具体的に紹介している。また「古代アッシリア、ニネベ遺跡の発掘を撮影」したとき、粘土板に「びっしり楔形文字が刻んであり、ここは太古の図書館のあとだった」ことにもふれている。退職後は自宅で書きものすることが多く、事前に集めたもの以外に必要な資料が出てくると、近くの図書館へ行く。新聞は自宅ですべてのもの以外の「書評欄や調査記事を読み、歩いて行ける小さな区立図書館へ行」き、それで用が足りる。本は、持っていないものが「一冊は区立の中央図書館に、他は都立中央図書館にあることがわかったので、取り寄せてもらおうとしたのだが、実に非能率的なので結局、直接行くことにした」。「こういう区立図書館の主な業務は、新聞雑誌の閲覧と新刊ベストセラーの貸出しに限られるらしい」。「図書館のさまざまな役割分担はわかっているつもりだし、レクリエーションという一項がその目的にはいつている以上、ベストセラーの同一本を何冊もそろえる必要がある、というのも承知しているつもりだが、図書館が新刊の貸本屋と化しているのは情けない」。「いのちの長い本」との交流もできるように、復刻でいいから「小さな図書館ほど、明治大正の名著や古典文学」を書架に並べてほしい、と述べている。

41. 目取真 1960 「原点としての場所」

「高校の図書館は、校門から入って一番奥にあった」。高三の夏休みには「毎日のように図書館に通っ

て、受験勉強もせずに詩や短歌ばかりを書いていた。図書館の一角のソファが生徒たちの溜まり場になっており、「司書が理解のある人で生徒の自由な活動を尊重してくれた」。「高校の図書館には、たんに学習の場としては取まらない、生徒たちが自主的に交流できる空間があってもいい。私が過ごした高校の図書館にはそれがあった」として、図書館で手にした本に衝撃を受けたこと、卒業間近に友人たちと雑誌を作って、短歌や詩を書いたこと、などを述べている。1970年代後半の沖縄には、利用可能な公立図書館はなく「おそらく、高校時代に図書館で過ごす日々がなかったら、こうして小説を書いていることもなかっただろう」「高校の図書館への感謝はつきない」としている。

42. 草森 1938 『規則の寛大さ』について

「田中真紀子外務大臣が、国会図書館に閉じこもっていたというニュース」は「私なりに面白かった」という。国会図書館は「国会議員の勉強に供するために書物を集めたところのはず」だが、「業者が入ってコピーサービス工場化して（ありがたくもあるが、しばしば腹も立ち、ヒヤヒヤ、イライラもする）、国会議員のためにあるという本来の趣旨を忘れがち」になっている。「私は、『本のかたち』で書物を読みたいタイプ」で、「できるなら自分の所蔵している本で、ゴロリ寝転がって読みたい」ので、「二十代半ばごろまでは」「図書館に出入りしたことはなかった」。「閲覧室の息をひそめた静かさというものが、かえってうるさく感じられ」た。「物書きのはしくれ」になり「本を資料として読む」ようになって、「買うことの限界を感じるようになった」。古典や雑誌のバックナンバーは、高すぎたり、手に入らなかつたりするので「時に図書館へ行くしかない」。「コピーは著作権がからむので、めんどろだが、係員の規則一点ばかりには、なんだか私も腹を立てたことがある」し、大目に見てもらったこともある。また、国会議員に、コピー禁止になっている本を借り出してくれるよう頼んだことの経緯について紹介している。規則は不快なものだが、「状況の変化によってクルクル規則はかわっていく」として、コピー許可の状況についての具体例をあげている。

43. 鳴海 1953 「サラリーマン作家の図書館利用法」

「子供の頃から物語を作るのが好きで、夢は小説家になることだった」。エンジニアとして働きながら、結婚し子供ができて、「休日の習慣のひとつ」として「狭い社宅から逃れて、当時住んでいた市の図書館へ通っていた。国会図書館などまだ見たこともなかつ

たし、県立図書館も遠かった。学習室で、私は受験生みたいに机に向かって小説の勉強をしていた」。受賞を機に著書が出版されることになり、装丁を依頼したい画家の連絡先を調べるため「隣の図書館へ」行って住所を調べ、依頼の手紙を出して、題字を描くことを引き受けてもらう。自分のホームページも開設しているが、「インターネットでも調べられないことはまだまだ多い」としている。

44. 吉田秀和 1913 「図書館をめぐる三つのエピソード」

「昭和の始めの旧制高校に通った」が、学校の近くの寮に入ったので「自由な時間がたっぷりあり」図書館へ入ってみた。「開放的で自由なところだったので、私は手当たり次第に棚から本をとり出し」た。「気がつくと、何時間もたってしま」ったが「言葉につくせないほど楽しい経験」だった。図書館の長所として、「自分ひとりだったら買ったはずのない本に出会えること」をあげ、「古今東西の無数の著者たちの声の聞こえてくる巨大な音楽みたいなもの」だとしている。また、「二〇世紀半ばごろ」ニューヨークに数ヶ月滞在し、「セントラル・ライブラリーの部長で、ニューヨークの音楽業界にも大変顔のきく人物に会うことになった」。図書館に行き、時間に余裕があったので「入口から近い新聞や雑誌のおいてある広間」に入り「居心地の良い部屋」でうとうととしてしまい、「気がつくと約束の時間は大分過ぎてしま」ったが、それを詫言ると、親切に接客してくれた。さらに、ベートーヴェンについて調べているとき、「晩年のピアノ・ソナタの自筆楽譜」を「ロンドンの大英図書館とベルリンのプロシア文化財団」で「旅券をみせ、申込書を書くだけで、即時見せてくれ」た。料金も取らず、ゆっくり調べさせてくれたことについて、「こういう図書館こそ、最高の文化は世界中の人間に対し開かれている現場だという証拠にほかならない」のではないかとしている。

45. 佐野 1947 「出版と図書館」（講演）

この文章は、2001年の「図書館総合展」での講演「出版と図書館」の抄録である¹⁾。佐野は2001年2月に『だれが「本」を殺すのか』（プレジデント社）を刊行し、出版界や図書館界で話題となっていたが、「本を殺しているのは読者だ」とする²⁾。図書館については「非常にギルド的」「隠語が多い」「人件費」が50%を占めている、「利用者とつながっていない」などの問題点を指摘している。また、「日本における図書館教育のなさ」や「民間図書館との」「交流が図ら

れていない」ことも述べている。さらに「無料貸し本屋状態」になっていることについて、「強くこれは言うておきます」として「宝くじに当たる本とか競馬に勝つ本とか、それまで貸してやる必要はあるんでしょうか。そんな本ぐらいてめえで買えよと、なぜみなさん言えないんでしょうか」と主張している。なお、佐野の見解に対しては、元岡山市立図書館・田井郁久雄による詳細な反論が発表されている³⁹。

46. 米原 1950 「ドラゴン・アレクサンドラの尋問」

「在プラハ・ソビエト学校小学部二年に編入して四ヶ月」「ようやくロシア語の簡単な単語なら」読み書きができるようになっていた筆者は、「比較的活字の少ない、絵の多い本を図書室から借り」「読み終えた本を、図書室の受付カウンターのところまで返却しようとした」とき、カウンターにいた女性から、本の内容について話してみるようにと言われる。「何とか本のあらすじを最後まで話し、さらに作者のメッセージを曲がりなりにも言い当てることができた」。やがて「語り聞かせることを想定しながら読むようになり、「内容をできるだけ簡潔にかつ面白く伝えようと腐心して」読むようになった。「その方が面白く、集中力が増すのか、それともロシア語力が伸びていた時期と重なっていたせいか、読む速度がどんどん速くなっていった」。そうしたことをくりかえしていると、「いつのまにか、わたしの表現力の幅と奥行きは広がって」いて、図書室担当の女性に心の中で感謝したことを紹介している。

47. 笙野 1956 「小説・S 倉極楽図書館」

猫のことで、賃貸マンションを追い出され、千葉に家を買って引っ越したが、その経過が出てくる著書の一冊『渋谷色浅川』は「図書館の買い上げ数が新潮社の調査ではほぼ2千冊」だという。「普通は数百冊ともその時に聞いたから実に『図書館作家』、リクエストが多いという証拠」だとする。出版社から手渡される読者カードにも、図書館の本からとったものがあり、「殆ど例外なく、『ツボを心得た絶賛』」で、中には、年金生活者や失業中の人もいた。また、「鷗外の娘、異端の女天才森茉莉をモデル」にした作品を執筆した際に、「森茉莉全集」があるので、「東京での執筆中私は森鷗外図書館と文京区大塚の都電すぐ近くの、中央図書館を交互に利用し、また別の資料を求め豊島区要町の図書館にも行った」。要町の図書館では、処分する棚にあった本の中の一冊について、その著者との「縁」があったことにまつわるエピソードを紹介している⁴¹。

48. 堀江 1964 「此処に井戸水と葡萄酒があるよ」

「早稲田大学の本部図書館にはじめて足を踏み入れたときに感じたのは、高校の小さな図書室では味わったことのない、書物を取り巻く空間とのある種の共生の思いだった」。文学部には「専門の学生に使いやすい書籍と翻訳の全集ばかり効率よくならべた学習室があり」講義の間の調べ物や知り合いを誘うのに便利だった。利用回数は学習図書室が多かったが、過ごした時間は本館の方がながい。「この図書館の閲覧室で、何冊も印象深い本に出会った」として、ある詩の作品を取り上げて紹介している。そして「大学図書館の、虚飾を廃した大閲覧室というどこか宗教的な厳粛さをたたえた空間」で生じる思い入れに言及している。

49. 浜田 1953 「世界のヒーローたちと出会った米議会図書館」

ワシントンを訪れても「議会図書館に足を運ぶ人は」あまりいない。地元でも「古色蒼然とした書物の山という地味な印象をもたれているのではないかと」する。「図書館の地下通路は」「米議会の主要なビルへもつながっており、核シェルターの役割を果たしていると思えるほど頑丈な作り」になっていることを紹介し、仕事の気分転換ができたことを述べている。「寄贈品保管部と映像・写真保存センター」に入り浸り、「その都度、何らかの新しい発見があ」ったとしている。なぜ、いつ、誰が、どんな目的で「寄贈したのか」。それらの資料には、「未公開情報が埋もれたまま眠っている」。「その存在に気づかせてくれた米議会図書館に心より感謝している。と同時に、資料保存と公開の重要性を改めて考えさせられる」と述べられている。

50. 鐸木 1955 「図書館が『本』の呪縛から解かれるとき」

「実は、図書館で『本を借りた』記憶がほとんどなく、そこは「緊張感のある勉強部屋を与えてくれる施設」であったとする。図書館には三つの機能があるとして、「一つ目は、資料（データや情報）を提供」することだが、「今ではインターネットに主役を完全に奪われている」という。インターネットは、たしかに「玉石混交」だが、今は「間違った情報が載っている本は山のようにある」し、インターネットは更新されるが、印刷物は訂正が効かないのが欠点だとする。「二番目に、娯楽や趣味の一環として、書籍を一般人に貸し出す」ことをあげているが、「図書館でベストセラー商品を貸し出す必要があるだろうか」といい、「公的な機関としての図書館は」「質の高い書物を末永

く提供し続けることにこそ使命があるはず」だとする。「三番目は、文化の保管庫」であり、「売れない作家にとっては、著作が図書館に入ることは」「絶版になった後も作品の命を長らえさせてくれる」ことだとする。「図書館で本を貸し出すことに意味があるとするれば、書店に並んでいない本をいかに多く提供できるかということに尽きる」とする。このように「図書館の機能はどれもことごとく落ちている」ので、「図書館自身が、『本という呪縛』から逃れることが必要」である。「これからの公共図書館の使命は、まさに『青空文庫』と同じものではないだろうか。「本という形にこだわる必要はな」く、「デジタル技術の導入は必須」である。「図書館は『新しい文化の発信基地』として生まれ変わることも可能」である。「商業資本とは別のところから本を作り出すという発想」で、郷土史研究、専門分野の本、文藝娯楽などく図書館ネットブランド)を考えたらかどうか。「本にはならない貴重な情報や作品」を「埋もれさせず、発掘し、届けることこそこれからの図書館の使命ではないか」。それには「本当に本を愛している図書館員、つまり『人』を育てられるかどうかが鍵になる、と主張する。

51. 平出 1950 「わたくし図書館」

私小説、私小説家、のあり方を「私の目前に示してくださった川崎長太郎さん」の「図書館との簡潔な付き合い」について「家には蔵書の類いをほとんど置かず、必要なときは図書館に通った」と紹介している。また、ドイツ、ベルリンの『焚書図書館』と呼ばれるモニュメントが「本のない図書館」であることをあげている。

52. 片岡 1961 「水曜日の図書館」

「私の好きな図書館」は「所沢図書館椿峰分館。やはり図書館は分館でしょう」という。「居ながらにして、本が安心して死んでゆける場所というのは、限られている。永遠の書物などというものは無い。ひとと同じにほとんどの書物も死んでゆくものだと思う」「書物の集積場所である図書館が、甘美な堕落指南の場所であって悪いはずはない」とする。「私がもし図書館員になることを希望するとしたら、採用試験の面接では『地域の情報発信基地の一員として!』とか『地域文化のリーダーとして!』などと言うかもしれないけれど、本当のところは古びてゆく本の匂いを嗅ぎながら、本と一緒に、あるいは本に埋もれて死んでゆきたい、そうでなければ腐ってゆきたい、そういう願望しかないだろう」という。また、「私の詩は図書館から始まった」として、小学校の図書館で出会い、

繰り返し借りた詩の本に、所沢図書館の本館で再会してきたことを述べている。「最近、図書館に足を踏み入れると、少し異様な感じがすることがある。以前は、本を探す、借りる、何かを調べる、勉強するといった、目的を体現しているような人だけで占められていた気がするのだけれど、この頃は少し違う。無目的とまでは言わないけれど、手持ち無沙汰そうなひと、本嫌いとは言わないけれど、本が好きというのではなさそうなひとが、行き場を無くしたように、図書館の椅子に腰掛けている。私はそういうひとがそこにいることを、プラスの感情で眺めている。「年齢に関わらず、どうやらまだ生きている、けれど、することがない、何をしたら良いかわからない、そういう人のまわりを、人の手を何度も渡って柔らかくなった本が取り囲んでいる風景は、なかなかだと思ふ」というように、多様な利用者が存在している最近の図書館の状況を肯定的にとらえている。「どこもかしこも機能的である必要はない」「現役の人に対しては、機能的なカウンターもあり、超人的なスピードで、書物を揃えてあげられる職員の方がいらっしやったりして、そういう、ちゃきちゃきなコーナーもあるならば、図書館の隅で発酵してゆく人の存在も許されるだろう」としている。

53. 黒川 1961 「利用者への『壁』にならないカウンターを」

「私は小説や評論を書いて暮らしてきたけれど、図書館との関わりの上では、著作者である以前に、一人の利用者である。これは、作家である以前に、一人の市民であるということと変わらない。「いま住んでいる地域の図書館にも、かなり頻繁に通っている。図書館という空間が好きだし、私のような民間の物書きは、調べものや本探しでも、多くを公共図書館に頼ることになる」という。最近「新聞などのメディアで、図書館をめぐる議論をときおり見かける。——公貸権とか、コピーの規制とか、複本の制限の要求とか。あるいは、公共図書館の図書購入費の削減とか、旧蔵書の『廃棄』(除籍)の加速化とか」が話題になっているが「こうした議論や報道のなかでは、案外、利用者が実際に本を借り出す『図書館カウンター』という具体的局面の現状が、論者たちの目から、すっぱり抜け落ちたまま」だと感じている。「東京に住む私が、日ごろ利用している近所の区立図書館には、インターネットに接続できる来館者用端末は置かれていない」。来館者は区内の図書館での状況しかわからず、職員用端末だけが、都立図書館にも接続している。区立図書

館の蔵書数は限られており、所蔵しない本について利用者に「職員（不慣れたパートタイマーなのかもしれないけれど）が『うちの図書館でご利用になれるのは、区内の図書館で所蔵されているものだけです』と“説明”しているのを見かける。都立図書館や国会図書館から借りることは、説明されず、掲示もない。別の区でも、強く要求しないと、取り寄せてくれなかったり、手続きをしても予約が“立ち消え”にされてしまうこともあった。「地域の住民にとって、図書館利用のいっさいの窓口となるのは、カウンターの職員である」。それが「来館者に十分な利用上の情報を与えてくれないと、ごくふつうの子ども、主婦、勤め人、老人から成っている地域住民は、図書館利用の手だてを奪われる」ことになる。「地域図書館で利用者に情報格差（デジタル・デバイド？）をもたらすのは、まず第一にカウンター職員の十分ならざる対応である」として、行政担当者、地域図書館の当事者にも理解を求めている。また、都立図書館のOPACから提供されている情報の不確かさについて、具体的な事例をあげて紹介している。さらに、公共図書館が「文化的な共有財産」として機能していくために「図書館自体が利用者住民による提言懇談会のような仕組みを取り入れていくべき」としている。

54. 中上 1971「生きる糧が詰まった空間」

「子ども時代を過ごした家は、図書館のように大量の本で溢れていた」という。「父親が文筆業」で「本がいたる処にあっても気にならず、むしろそれが当たり前」と思っていた。やがて、「本で埋めつくされた」「居間を狭苦しく感じるようになっていった」。「親は、子どもの読書に関してはほとんどノートタッチで、読書しなさいと言われた記憶もな」く、「幼い頃の私は本が大好きで、絵本でも児童書でも、手当たり次第に読んでいた」。「中学生になったあたりから、本と聞くだけでうんざりするようになった」。そのころ「図書館は、本を借りたり読んだりするところでは決してなく、休み時間や放課後に友だちと喋ったりくつろいだりする場所」だった。高校一年からロサンゼルスの子供校に入ったが、学校で出されるランチが高カロリーすぎたため、「昼休みは必ず図書館で過ごすようになった」。「図書館員から死角になっている本棚にもたれて座り、しばしば昼寝をした」り、試験前にはそこで勉強し、「ホームシックになった時は、日本を紹介する写真本」を見た。「それからは、本を通じて出会うさまざまな世界の文化が楽しみで図書館へ向かった」。「学年が上になるにつれて調べ物をしたりする機

会も増え、図書館がますます必要になった」。「図書館の館長はただ一人いる日本人の修道女で、彼女は私も含む日本からの生徒たちの相談役で」「いつでも心のこもったアドバイスをしてくれ」た、という。「ハワイの大学に進んでも「放課後は必ず図書館に籠もって数時間を過ごした」。

55. 松山 1945「本たちの日常」

「私は仕事柄よく図書館を利用している。多くの場合は歩いて行ける都立図書館と区立図書館」「ときには国会図書館や近代文学館など」「平均すれば週一回ぐらいでどこかの図書館へ足を運んでいる」。家は狭いし、「近くに図書館があることは本当に助かる」「引越し難い理由は図書館が近くにあることが一番大きな理由だとさえ考えている」。「ここには本たちの日常があるとつくづく思う」。はじめて入った大きな図書館は、都立日比谷図書館で、「子どものときは円形の図書館だった」「あまりの本の量に驚き、しかもいろいろな人がずらりと坐って本を読み、調べている姿にも圧倒され、すぐに図書館を出てしまった」。「図書館はいまでも非日常の読書空間」である。図書館に行けば「百年前どころか、五百年前の物語も、千年前の哲学も、紀元前の詩も棚に並んでいる。これが本たちの日常である」。同時多発テロ事件の後、新聞の書評委員をしていて、関連書の書評が並ぶと知って「全く無関係の美術の本を書評して紙面に載せた」。「本たちの日常を守って欲しいと希ったからである」「世界の危機を問う本が一方にあれば、他方ではのんびりと楽しい趣味を語る本もある。これが本たちの日常である」。「図書館で私たちが出会うのは、このじつにいろいろな表情をし、いろいろな物語や発見や知識や記憶や思考へと導いてくれる雑多で、渾沌した本の世界である。たとえ私が考えることに反対の意見を綴った本であっても図書館の書棚には置かれている。これが本の世界の日常である」との思いがあった。「図書館には本当に沢山の本があり、多くの人々が本を読んでいる。あの雑多な本と人々の表情に、圧倒されながらも私はつくづく本たちの日常がここにあると思う」。

56. 室井 1955「〈本番〉の日々」

筆者は「元図書館員」であった。二十代半ば、就職試験に失敗し「某私立大学の図書館」で「嘱託職員」になった。「図書館員になるのが夢だったわけではない。たまたまわりふられた場所を特別視するような性向」がある。職に就いた夏に「速成の講習に通い司書の資格を得た後、図書館業務を一通り体験」した。「和書・洋書の分類整理係、雑誌係、レファレンス・

ツール（参考図書）係、貸出・閲覧係、それに蔵書点検等々、図書館員なら誰でもやらされる仕事を私もしごくまじめにこなしたつもり」である。洋書係で「外国語学部の新設」により、「中国語、ロシア語、朝鮮・韓国語、アラビア語、ヒンディー語文献」のテキスト群の整理に取り組んだ。ボルヘス『バベルの図書館』の邦訳が出ると、「元図書館員のモノカキが座右に置くべきミニライブラリーのような気がしたので無理して買いそろえた」という。

57. 林あまり 1963「びくびく」

「子どもの頃、そして少女時代、『本が好き』と明るい笑顔で言い切ったことがなかった。「当時の図書室には」「子どもたちは寄りつかず、そこそこ広くてきれいだが、ガランとしたそこに「泥棒のようなびくびくした気持ちで」入り、「物語の棚の前でしばらく迷ってから一冊を抜いてカードに記入し、借りて帰った。「学校の調べものか何かで必要になり、中学二年くらいになって、電車で」図書館に行った。「いまでも、図書館で本を借りることはしても、館内でゆっくりと読書して過ごす習慣を持たない。まわりに人のいるところで本が読めない」という。「図書館に行くと、私はいまでも少しびくびくしてしまう。ちょっとでも感じの悪い応対をされると泣きたくなるし、じっと見つめられると逃げ出したくなる。「本、そして読書は、個人の心の奥深くにかかわってくる問題」なので「図書館のスタッフの方々は」「口から出るひとことひとこと、ちょっとした表情や態度にまでぜひ心を砕いていただきたい。『しずかなほほえみで優しく』接していただけたら」という。

58. 菅 1963「図書館という砦」

「小学校から高校まで、ずっと図書委員」で「読書で現実逃避する毎日」だった。「書架でできた本の砦の中へ籠るのも好き」で「本を手にとらず」「ぼんやりするだけの時間も、私はこの上なく愛していた」。小説家となってからも「自宅近くの図書館にはたいへんお世話になった」。特に「アイデアをシノプシスへと練り上げる段階」で、自然科学や百科事典から「使えそうな専門用語を芋蔓式に調べていく」。「百科事典だけに限って着目しても、複数種類を常備した図書館に幾度救われたか知れない」という。「近ごろではめっきり図書館へ行く機会が減ってしまっている」。代替は「もっぱらインターネット」で、「書架を渡り歩き芋蔓式に拾い読みする行動は」ネットサーフィンと「感覚的に近い」。しかし「インターネットは私を現実から守ってくれはしない」し、「筆者たちの

生の姿を通して、世間や現実というものをあからさまに突き付けてくる気さえる」。「図書館とネットのどちらかを選ぶのではなく、現状はうまく使い分けるのがよさそうだ」という。

59. 久世 1935「〈知〉の図書館」

「図書館と聞くと、かならずベギー葉山の歌『学生時代』（〈鶯のからまるチャペルで〉〈秋の日の図書館の、ノートとインクの匂い〉）を思い出す。昭和三十九年（1964）の「ベギー葉山の出身校の青山学院がモデル」だという。「私が入り出したのは本郷の東大図書館」で「あのころの図書館と言えば、暗かった。寒かった。田舎の土蔵の中に似た、ちょっと酸っぱい空気が籠もっていた」。「その代わり、一本の銀の糸のような芽え芽えとつよいものが、輝きながら高い天井から降っていた。それを私たちは〈知〉の光だと思っていた」。「本郷の図書館」に「週に十時間ほどは」「いたような気がする」。調べものをした記憶はなく、画集を机に広げ、「ただぼんやりと眺めているだけだった」。それでも「青春時代の中でいちばん〈知的〉な時間だったような気がする」。「このごろの図書館は」整備され、機能的にも変わったらしいが「私はこの何十年の間、大きな図書館へも、街の図書館へもいったことがない」。必要な資料は、編集者の人に頼む。「私は図書館の幻影が崩れるのを見たくないのだ。それは〈知〉の幻影と言ってもいい」。「流行のベストセラーも結構だが、古典とのバランスはどうなっているのだろう」。「文化とはほどよい均衡のことを言う」が、出版界ではわが国の近代文学作品が絶版になっていく。「それがそのまま図書館の書架とイコールになってしまったら、わが国の〈知〉の領域はどうなってしまうのだろう」と述べている。

60. 野中 1946「自由の天地へのステーション」

「子供の頃から、図書館は、お気に入りの場所のひとつだった」。放課後に「私だけがひとりで図書館へ」行って「興味をそそられた本を読み耽る」。両親は子供時代に「できるだけ多くの本を読んでおくべきだ、ということを経済方針のひとつにして」おり、本をプレゼントしてくれたが、それは子供にとってハードルの高いものが多かった。「活字の大きな、ちゃんどルビの振ってある、夢に溢れた物語」「幼い人たちのために書かれた綺麗な絵本」など「親に買ってもらえない、そうした本を図書館で探し求めた」。図書館は「現実を超えた自由の天地へ出かけるためのステーション」だった。二十代の一時期、アメリカで暮らした。その町の大学は「アジア研究の盛んな学校」で、

図書館に「日本語の本や雑誌、新聞」があり「日本の活字を貪るように読んだ」。「母国の言葉にとても、とても飢えてい」て、日本の作家の本も読み、日本文学の名作にも触れた。「そんな日々の中で、私は、自らも小説を書き始めた」という。

61. 三木 卓 1935「学校図書館とわたし」

ある学校の図書館で、司書が本の整理をしている中に「半世紀ほど前には若い人にとても愛されていた」翻訳書が入っていた。古いだけで手にとってもらえないこともあり、廃棄予定の本の山は、背が黒く変色しており、「廃棄は今時、当然のことなのかもしれない」が、好奇心をもって調べる生徒がいるかもしれない。新しい本を入れるとスペースがなくなるなら「学校図書館を、拡充して」はどうか。「高名な文学者が、公共図書館にサイン入りの自著をたくさん贈呈」したが、古ぼけてきたら捨ててしまった。サイン本などは、どこの図書館でも気をつけてほしい。学校図書館では「生徒が何を調べたいのか、何を読みたいのか、本来予期できないものではないのか」。「死蔵に近い状態になる本が増えるにしても、図書館としてそれに応え得る〈可能性〉を自ら捨てるべきではない」。今の「新刊書店には時間の堆積、文化の堆積が圧倒的に薄い」。「図書館は、必要な本はどんなに汚くなくても、古くなくても、こどもが手にとらなくなっても、残しておかなければならないところである」という。

62. 白石 1960「背文字のポエジーとトイレと」

「本のことを思うと、ちょっとブルーになるときがある」として、ふえていく本とその整理について述べている。「本が昔のように貴重品ではなく、消耗品のようになったから」書店の雰囲気が変わり、小さな書店が消え、「大きな書店に目的意識を持って行くようになり、欲しい本を買ったらおしまい」になった。「図書館をとりまく空気だけは変わらない」「図書館はいつ行っても、どんな状態でも受け入れてくれるし、発見があるし、本っていいなあ、と素直に思う」。「書店だったなら絶対に行かないジャンルの本棚や海外文学のところに立ってばーっと眺めるのが大好き」「閲覧のコンピューターで調べるのも好き」「全スポーツ新聞の芸能欄、読み比べも楽しい」。「私の場合、図書館に行くというのは、あんまり気負わずに、なんとなく行ってみようか」「ふらりと行くのが一番いいみたい」「あるときは買ったばかりのお厚い本を持って、図書館で読みきろう、と決めて行く」「とにかく本だけの世界に浸る」。「『若者の活字離れ』なんて図書館

にいと、嘘じゃないか、と思う」「魅力的な本を提供できないまま、ただやみくもに新しい本を出し続ける出版社の愚痴のようにしか聞こえない」「本のことを考えると図書館のほうが、可能性に満ちている気がする」という。

63. 柴田 1954「幻想の図書館・現実の図書館」

小説の中の図書館について、リチャード・ブローディガン『愛のゆくえ』をとりあげ、「そこはとても変わった図書館だ。名もない人々が、自分にとって本当に大切なことを書き、書き上がったら、世界にたった一冊しかないその本を、この図書館に持ってくる」と紹介している。また、ユーゴスラヴィアの作家ダニロ・キシユの短編『死者の百科事典』にある「詳細な伝記的記述を集めた本が『中世の図書館のように、太い鎖で書棚の鉄の輪につながれて』いる」例をあげている。現実の図書館では大田区立大田図書館を「蔵書量は抜群」「館員の人も」「親切」で、「この図書館まで行って調べものや捜しものをするのは僕にとって最高の贅沢」としている。「図書館の予算が年々減っている」「司書の数が減っていると聞いた記事をみるたびに胸が痛む。大田区内の図書館の利用者は年々増えているというのに……」。また、都知事選の候補者が、都立図書館の合理化を訴えているのを見て愕然としたことを紹介している。図書館について望むこととして、「本が一回貸し出されるたびに著者にながしかの額が支払われるようにする」こと、「本の揃え方」は「少数の本をきっちり揃えて」こと、「書庫はできる限り一般利用者に開放してほしい」こと、をあげている。

64. 中井 1934「図書館に馴染まざるの記」

「戦時中の小学生に学校図書館はなかった」。「敗戦の翌年、旧制高等学校尋常科に入学し「図書室が高等科と共通」で、「図書館の受付の女性に可愛がられて書庫に入れてもらった」。九鬼周造の蔵書が寄贈され「九鬼文庫」となっていて「著者のサイン入りの豪華本」を手にとった。大学入学当初には「大阪駅に近いビルの一階を使っていた米軍のCIE」の図書館を利用していた。本がみつけやすく、盗難や切り取りもない。また「米国人司書のプロらしい采配と利用者へのあふれる好意も忘れられない」としている。「今の私は図書館のよい利用者ではない」「図書館の本はいつもあるという保証がないので困る。なるべく買う。大学の図書費を使わず、私費で買う。懐をいためた本でないと真剣さが足りなくなる」という。また、蔵書を寄付する行為が迷惑となるケースがあることについて

は、小さな図書館を運営した経験から知っており、「図書館が多くの本を廃棄せざるをえないことは了解できる」とする。一方、ある調査事項について、明治大学が古い雑誌を保存していることで、事実が確認できた例を紹介している。

65. 日垣 1958「原稿料と印税の話」

作家の具体的な氏名をあげながら、原稿料と印税についての歴史的な流れを中心に記述している。

c 01. 常盤 1931「ある図書館」

「ニューヨーク・パブリック・ライブラリー」中央館周辺の状況から連想して、「図書館をテーマにした短編小説のアンソロジーを読んだ」中に「ユダヤ系作家の少年時代を回想した一遍」があったことを紹介している。その作家の本を「読みかえすたびに」「戦中の中学一年のころ、学校の帰りに図書館で鞍馬天狗を読んだことを思い出す」という。

c 02. 司 1936「アトリエと本箱」

「図書館へ行くことがまったくなく長い間過ごしていた」が「小説を書くようになって、あちこちの図書館へ走るようになった。図書館にいる心地よさを知ってしまった」という。「特に司書の方と息が合うと、とことんまで調べが進む。予想もしない本に出会った例として、ウイーンの図書館で銅版画を見たところ「近くにいた司書は、ボクが関心を示す絵から、関連ある版画を持ってきて見せてくれた。そのようなことは日本の図書館でいまだ経験することがない」という。

c 03. 泉 1956「永田町のタイムマシーン」

「永田町の『国立国会図書館』に初めて入ったのは、十年ほど前のこと」で、当時『B級ニュース図鑑』という「新聞の隅っこの方に、大事件とまではいかない、けれど妙に味のある内容の」記事をまとめた本を作っており「国会図書館の『新聞閲覧室』に日夜通っていた。「あの頃、国会図書館の新聞閲覧室は、僕にとって『タイムマシーン』のような部屋だった」という。なお、泉の別のエッセイでは、国立国会図書館職員の対応について「本館四階の地図室。寡黙なその部屋の空気に見合った、おそらくこの何ヶ月か頬の筋肉を緩めたことがないような趣の婦人が受付に座っていた。「頬の筋肉の凍結した婦人は、シレッとした乾いた声で言った。『一度に五冊までです！』ロシアのパンの配給を受けるように、僕は五冊の住宅地図をもらい受け、席についた」と描写されている⁵⁾。

c 04. 町田 1962「おくでの俺」

筆者は「二十七歳くらいまで図書館に入ったことが

なかった」という。「住んでいたのは大阪の市中で図書館はいくつもあった」が、同級生が「ノートを写しあっていたのが公共の図書館」でそのような態度が厭だった。「仕事に行き詰まり、一切の活動を停止して蟄居」していた時期、買い物の帰り、普段行かぬ道をふらふらしていると、見なれぬ立派な建物があり、そこは図書館だった。「図書館では万卷の書物が無料で読めるのである。そんなことはちっとも知らなかった」。「以降、三年間、自分は毎日図書館に通って」「当時の自分にとってはパラダイスのような場所であった」という。

c 05. 柳瀬 1943「インターネット図書館」

「インターネットという図書館が超高速度で膨張している」が、難点は「不要な情報が、あまりにも大量に混じっている」ことである。調べものの際は、「www.robotwisdom.com」から入るのが「最善であるように思う」。ジェイムス・ジョイス『ユリシーズ』についてインターネットが有効であるような具体的事例を紹介し、「インターネット図書館はこんなふうによばらしい」「しかしやはり『本』はなくなることを固く信じている」と述べている。

c 06. 天沢 1936「図書館って本当は何する所？」

「図書館とは何か？ 図書がたくさんつまった建物。では、図書館とは、何をしに行く所？ これがよくわからない」という。小学校四年の秋、初めて入った町立図書館で『アラビアンナイト』を読んだが、「途中で本を閉じて図書館から逃げ出し」てしまう。町一番の本屋が母の実家で「一言いえば何でも貸出してくれ」「私にとって便利な新刊図書館」で、「暗く怖ろしい町立図書館には二度と行かなかった」。高校生とき「図書委員会の常任委員」で「学校図書館は私の住む場所であり、仕事場でもあった」。「沢山の本を借出しては読破」し、「授業をさぼって友人と将棋」をさしたり、貸出し事務をし、購入図書を選定し、『館報』を編集発行をして、そこに「エッセイや文学時評や書評や総合雑誌評を書いた」。「自分の大学図書館にはなぜかほとんど足を踏み入れなかった。必要もなかったし、とくに関心もなかった」。次に図書館にハマったのは「留学以降のバリ国立図書館」で、「研究テーマのための必読文献」「最新専門誌の論」「中世写本」などを読んだという。

c 07. 多和田 1960「夜の図書館の顔」

著者は、ハンブルグ中央図書館を利用している。「学問的な調べものなら大学図書館へ行くが、借りて読んでみたい本がある時には、市の中央図書館に寄

る。「商店や劇場の立ち並ぶ中にあるので場所が便利で、しかも雰囲気が出る。ビデオ分館にも随分お世話になった」という。図書館の閉館後「本棚に囲まれて、椅子の数十個並べられたところで、作者が自作の朗読をする。わたしも作家として、週に一度くらいどこかの町でそういう朗読会をする」。その企画をしていた E さんが定年退職することを紹介している。

c 08. 陣野 1961 「街の図書館の音源」

「以前、杉並区の荻窪に住んでいた頃、すぐそばに中央図書館があってよく利用し、「音楽関係の原稿を書くとき、所蔵の CD がとても役に立」ったとして、具体的事例をあげ、「ある『見識』を感じさせる音源のあり方だった」という。しかし「こんな僥倖は滅多にない。図書館の音楽コレクションには、頭をひねるものが多い。流行っているもの、売れているものにばかりシフトすると、5年、いや3年経てみれば、誰も顧みないような軽薄な音楽が主流になっていることが往々にしてある」。「引っ越してきてから私はほとんど地域の図書館を利用してない。資料的価値がない、と思うのだ」「図書館はレンタル CD 屋ではない」「ヒットチャートを賑わすような音源にばかり目を向けていると、使い捨ての音楽だけを後生大事に保存する」ことになるという。「ひとつの具体的提言は、あるレーベルを集中的にコレクションしてみる、ということだ。歴史的に意味のある（とされる）レーベルを」。「図書館同士の横の連携も大切」で「独自性を街の図書館の音源に感じることができたら、とても素晴らしいと思う」とする。

c 09. 金井 1947 「発見の場として」

「図書館を利用することがないのは、私の書いている類の小説やエッセイの性質上、然るべき図書館で調べなくてはならない、といったふうの〈資料〉が必要ない」からだとする。印税で生活しているので「読みたい本は」「買うのが」「業界の仁義」という。「区立の図書館の前を通ると」「図書館のすぐ隣か前か裏」に「住んでいる小学生だったら」「毎日図書館で本を借りて読む」のに、と夢想する。「本を学校の図書室で借りて、読みひたった小学生の頃の本を読む楽しさを」「小さな（児童図書館風の）区立図書館の建物がよびさます」ことがあるという。「繰り返し読むために、好きな本は手元になければならない」としても「（繰り返しして読むかどうか、判断を下すために）図書館は」「夢の身近な宝庫」であり、「小さな図書館は」「『繰り返し読む本』の発見の場であってほしい」とする。

c 10. 佐藤 1949 「夏の約束」

「わたしは図書館が好きだ」。旅先で「知らない町の図書館に入り、「子どもたちが静かに本を読んでいる姿をみると心がほぐれてくる」。「一生持ち歩ける知識ほど財産はない。それを図書館は無料で貸し出してくれる」「書物を読むか読まないかで、知識は大幅に違ってくる。そういう意味では図書館は知識を得るための宝庫だ」という。「以前は近くに住んでいたの、浦安図書館に毎日のように通った」「近頃は地元ではないが千葉ニュータウンの白井図書館によく行く。浦安図書館よりは狭いが、働く人たちの応対がいい」「図書館は司書の知識で、いい本があるところとそうでないところが顕著にわかるが、目配り次第でいい本が揃う。良書を幅広く入れてもらいたい」としている。夏休みに、十二歳の息子が「図書館に通うようになった」。「わたしも、中学生の頃から図書館に通いだし性格がずいぶんと変わった」。息子に、生れた町の図書館に行ってみようかと誘うと、すぐ同意した。「浦安図書館はわたしを作家にしてくれたところでもある」「下手な旅行より図書館めぐりもいいなおもった」としている。

c 11. 海野 1939 「リーディング・ビトウィーン・ザ・ライアンズ」

〈オールド・ニューヨーク〉を語る時、欠かせないのが「五番街四十二丁目の角にある ニューヨーク・パブリック・ライブラリーである」。「二十世紀初頭のニューヨークの一番美しい建築」といわれ、正面に大階段、両側に二匹のライオン像があり、若者たちの待ち合わせ場所になっている。「この図書館がニューヨークの人たちにいかに親しまれているか」具体的な作品をあげ、「図書館がママを思わせる」というエピソードを紹介している。「建物は一九一一年に「私的なライブラリーを合わせて」つくられたが、「アンドリュー・カーネギーの寄附である」。「アメリカの美術館や図書館は、民間の人々の力で作られてきた。そのことが親しい雰囲気をもたらすのだろう」としている。「わたしもこの図書館の前の階段で友人と待ち合わせ」たことがあり、「石段に座ってまわりで見とれていると、いつの間にか、隣に友人がいた」としている。

c 12. 多田 1930 「大学図書館にて」

「私が頻々と利用させてもらう図書館は、現在勤めている文系のカトリック大学の付属図書館で」あり、「いちばんありがたいのは、大きな辞典や文庫、双書の類が豊富に揃っていること」で、「一般人の家には

とうてい置いておけないもの」など、利用するのはその一部だが、「私のように古いものに関心ある人間が調べものをするのに、これほど効率のよい場所はない」としている。「文系の大学では、学生の好奇心が旺盛で図書館の利用法をよく心得てさえ居れば」教師はあまり必要でないのではないか、と思うが言わない。好奇心旺盛な学生はめったにいないし、「図書館を有効に利用する学生は少ない」。「授業に必要な最小限の参考書」や「気楽な読み物」を借りるくらいである。「私だって二十歳の頃はそれほど図書館に出入したわけではなかった」「家にある本や自分で買った本を読むので手いっぱい」だった。「図書館から借り出せば返さなくてはならない」し、「書き込みをしたり、赤線を引いたりするわけにはいかないのがいや」だった。「二十歳ごろの私は、今私が教えている学生同様、宝の山のねうちを知らなかったのである」としている。

3. 図書館はどうみられているか

—図書館の「多様性」に関する見解を中心に

雑誌『図書館の学校』に掲載されているからといって、全ての著者が図書館とのかかわりについて、ふれているわけではない。しかし、多くのエッセイは、なんらかの形で、図書館と関連のあるテーマを扱っている。中でも、海外の図書館の紹介・利用体験、子どものころや学生時代における図書館との関わり、インターネットの普及と図書館の将来、などのテーマは複数の著者によって扱われている。そうした中で、誰もが制限なく利用できる公共図書館サービスの現状と利用体験、サービスの方向性に関する意見をとりあげて比較・検討する。

たとえば、図書館資料の選択に対して、次のような意見がある。

37. 長澤 1956 は、コンピュータ関連の資料について、自ら調査対象としていた、パーソナル・コンピュータの歴史や文化史に関するものが少なく、マニュアル本が多いことを「まったく無意味な投資、利用者へのおもねり」だと批判する。図書館は「あらゆる文化に関する一種『考古学』的な発掘の場」で「司書の方々は何が『歴史』に組み込まれるか考慮して購入すべき」だとしている。しかし、エッセイの冒頭では「日頃、図書館を利用することは、減多にない」としているのである。

50. 鐸木 1955 は、図書館の三つの機能として、「資

料（データや情報）提供」「娯楽や趣味の一環としての貸出」「文化の保管庫」をあげている。中でも貸出に関しては「図書館でベストセラー商品を貸し出す必要があるだろうか」「公的な機関としての図書館は」「質の高い書物を末永く提供し続けることにこそ使命があるはず」として、デジタル技術の活用と「本にはならない貴重な情報や作品」を「埋もれさせず、発掘し、届けることこそこれからの図書館の使命ではないか」とする。しかし彼も、「実は、図書館で『本を借りた』記憶がほとんどない」と述べている。

c08. 陣野 1961 は、杉並区立中央図書館の音楽コレクションは好意的に評価し、よく利用していた。一方、「図書館はレンタル CD 屋ではない」「ヒットチャートを賑わすような音源にばかり目を向けていると、使い捨ての音楽だけを後生大事に保存することになる」として「歴史的に意味のある（とされる）」「レーベルを集中的にコレクションしてみる」ことを提言している。ただ、彼もまた「引越してきてから私はほとんど地域の図書館を利用していない。資料的価値がない、と思うのだ」というのである。

これらの筆者は、いずれも昭和30年代（1955-64）の生まれで、現在40代であり、図書館の資料選択について、調査利用を目的とした利用者に対応するため、一定の分担のもとに、資料の保存を考えていくべきとの立場から提言を行っている。しかし、実際の図書館に不満を感じているためか、現実には、ほとんど図書館を利用していないのである。

40. 吉田直哉 1931 は、「図書館のさまざまな役割分担はわかっているつもりだし、レクリエーションという一項がその目的にはいっている以上、ベストセラーの同一本を何冊もそろえる必要がある、というのも承知しているつもり」だが、「図書館が新刊の貸本屋と化しているのは情けない」とし、「小さな図書館ほど、明治大正の名著や古典文学の復刻を書架に並べてほしい」と、現実の中小規模の市区町村立図書館では、ほとんど不可能と思えるような希望を述べている。

61. 三木卓 1935 は、ある学校の図書館での廃棄予定の本をみて、学校図書館で「生徒が何を調べたいのか、何を読みたいのか、本来予期できないものではないのか」「死蔵に近い状態になる本が増えるにしても、図書館としてそれに応え得る〈可能性〉を自ら捨てるべきではない」と述べているが、実際に出版されてから年数が経過すると利用は低下していくし、それらの保存・提供は、現実の学校図書館では困

難な場合が多い。

59. 久世 1935 は、「流行のベストセラーも結構だが、古典とのバランスはどうなっているのだろう」と述べているが、「私はこの何十年の間、大きな図書館へも、街の図書館へもいったことがない」としており、やはり、図書館の実情を熟知した上での言及とはいえない。

これらの筆者は、古い資料や古典作品を保存し提供していくことの重要性を訴えている。しかし、いずれも昭和 10 年代（1935-44）の生まれで、70 歳前後の年齢層であり、最近の図書館の実情を正確に把握した上での提案とはいえない。

他にも、45. 佐野 1947 が「宝くじに当たる本とか競馬に勝つ本とか、それまで貸してやる必要はあるんでしょうか。そんな本ぐらいでめえで買えよと、なぜみなさん言えないんでしょうか」と述べているのに代表されるように、公共図書館の資料選択について、一定の分担により、調査・研究に役立つ資料を中心に、古い資料も保存していくべき、との考えが複数の著者により表明されている。しかし、図書館が分野によって特化することが、必ずしも利用者にとって望ましいものでないことは、すでに、図書館関係者から指摘されている¹⁾。にもかかわらず、こうした観点からの発言がなされているということには、図書館関係者も一定の注意を払う必要がある。

現実の公共図書館は、多様な利用者が、さまざまな目的をもって訪れるようになってきているが、こうした利用状況を肯定的にとらえる見解も、今回の『図書館の学校』巻頭エッセイの中には含まれている。

52. 片岡 1961 は、最近「本を探す、借りる、何かを調べる、勉強する」といった人だけでなく「無目的とまでは言わないけれど、手持ち無沙汰そうなひと、本嫌いとは言わないけれど、本が好きというのではなさそうなひとが、行き場を無くしたように、図書館の椅子に腰掛けている」という。「私はそういうひとがそこにいることを、プラスの感情で眺めている」。「現役の人に対しては、機能的なカウンターもあり、超人的なスピードで書物を揃えてあげられる職員の方が」いて対応するなら、「図書館の隅で発酵してゆく人の存在も許されるだろう」としている。

55. 松山 1945 は、「図書館はいまでも非日常の読書空間」であり、「図書館で私たちが出会うのは、このじつにいろいろな表情をし、いろいろな物語や発見や知識や記憶や思考へと導いてくれる雑多で、渾沌した本の世界である」とする。「たとえ私が考えることに

反対の意見を綴った本であっても図書館の書棚には置かれている。これが本の世界の日常である」と述べている。

62. 白石 1960 は「図書館をとりまく空気だけは変わらない」し、「図書館はいつ行っても、どんな状態でも受け入れてくれるし、発見があるし、本っていいなあ、と素直に思う」。「書店だったなら絶対に行かないジャンルの本棚や海外文学のところに立ってばーっと眺めるのが大好き」で「閲覧のコンピューターで調べるのも好き」だし「全スポーツ新聞の芸能欄、読み比べも楽しい」と、自ら多様な利用の仕方を実践している。そして「私の場合、図書館に行くというのは、あんまり気負わずに、なんとなく行ってみようか」と「ふらりと行くのが一番いいみたい」「本のことを考えると図書館のほうが、可能性に満ちている気がする」と述べている。

こうした例のように現実の図書館の状況を肯定的にとらえているのは、実際に図書館をよく利用している人たちに多くみられる。図書館の実情をふまえたこのような見解を、図書館がわは、より積極的に受け止めていくべきではないか²⁾。

近年のインターネットの普及によって、図書館の存在意義も大きく変わる、変わらなければならない、といった意見もみられる。

37. 長澤 1956 は、「インターネットでいくらでも情報が入手できる現在、図書館は、もっと特化された特殊な文化の場であってもいいと思う。それが平準化された市区町村立の図書館の多様化にもつながるのではないだろうか」と述べている。

50. 鐸木 1955 は、図書館には三つの機能があるとして、「一つ目は、資料（データや情報）を提供」することだが、「今ではインターネットに主役を完全に奪われている」という。たしかに「玉石混交」ではあるが、インターネットは更新され、印刷物は訂正が効かないのが欠点だとする。

一方で、インターネットだけでは、十分ではないことを指摘しているものもある。

43. 鳴海 1953 は、自分のホームページも開設しているが、「インターネットでも調べられないことはまだまだ多い」としている。

58. 菅 1963 は、「図書館とネットのどちらかを選ぶのではなく、現状はうまく使い分けるのがよさそうだ」としている。

c05. 柳瀬 1943 は、『ユリシーズ』「ジェイムス・ジョイス」についてインターネットが有効な具体的事

例を紹介し「インターネット図書館はこんなふうにするばらしい」としているが、「しかしやはり『本』はなくなることを固く信じている」と述べている。

インターネットの制約について指摘しているものもある。

33. 瀬名 1968 は、小学校で「コンピュータ室のパソコンはキッズヤフーがデフォルトで立ち上がるようになっていた」が、実際に使ってみると、検索に制限がかかっているため、ヒットしないことがあった事例を紹介している。

また、職員の対応の重要性も指摘されている。

57. 林あまり 1963 は、「図書館に行くと、私はいまでも少しびくびくしてしまう。ちょっとでも感じの悪い対応をされると泣きたくなるし、じーっと見つめられると逃げ出したくなる」「本、そして読書は、個人の心の奥深くにかかわってくる問題だ」「図書館のスタッフの方々は」「口から出るひとことひとこと、ちょっとした表情や態度にまでぜひ心を砕いていただきたい」「『しずかなほほえみで優しく』接していただけたら」としている。

53. 黒川 1961 は、図書館をめぐる「議論や報道のなかでは、案外、利用者が実際に本を借り出す『図書館カウンター』という具体的局面の現状が、論者たちの目から、すっぱり抜け落ちたまま」と感じている。「地域の住民にとって、図書館利用のいっさいの窓口となるのは、カウンターの職員である」。公共図書館が「文化的な共有財産」として機能していくために「図書館自体が利用者住民による提言懇談会のような仕組みを取り入れていくべき」としている。

これらの見解には、とくに目新しい観点が含まれているわけではないが、図書館の存在意義や職員の専門性を主張する際の背景となる考え方を説明する際に、利用することが可能なのではないのか。

4. おわりに

公共図書館の現状について、今回とりあげた『図書館の学校』の巻頭エッセイの中で、c10. 佐藤 1949 は、旅先で「知らない町の図書館に入り、「子どもたちが静かに本を読んでいる姿をみると心がほぐれてくる」「下手な旅行より図書館めぐりもいいなとおもった」と述べている¹⁾。また、ほぼ同じ趣旨の文章を、c11. 海野 1939 は、「図書館を旅する喜び」というタイトルで発表している。「私はいろいろな都市を旅する時に、図書館を訪ねることにしている。はじめ

は資料をさがすためだったが、そのうちにそれぞれの街の図書館のちがいが面白くなってきた。今では、特に本を読まなくとも、図書館に入って、その中をぐるりとまわって、書棚をのぞいたり、本を読んでいる人たちを眺めているだけで、なんとなくその街の雰囲気がわかるような気がするほどだ。「図書館なんてどこでも同じようなものだが、実はなかなかちがっている」として、公共図書館の開館時間や休日が、一定ではないことを、具体例をあげて紹介している。「図書館で見られるのは資料だけではない。そこではその街の人間を観察することができる。図書館の人たちがどんなふうにみんなに本を読ませたいと思っているか、街のひとたちが図書館をどんなふう利用しているか、といったことが、貸出の時のやりとりや、リファレンス・サービスの電話のやりとりを聞いているとわかってくる」「いくつもの図書館を旅しているうちに、私はだんだん、図書館のそれぞれの個性のようなものが見えてきて、ますます図書館めぐりが楽しみになってきた。ある都市に行くと、図書館に寄れないと、なにか忘れ物をしたような気がする」と述べている²⁾。日本国内の複数の公共図書館を訪問し、その現状を肯定的に評価する見解が、文芸関係者によって表明されているのである。

一方、2004年6月30日に開催された「公正取引委員会著作物再販協議会（第4回）」の協議内容が、7月9日に公正取引委員会から公表された³⁾。この席で、「文藝家協会の流通委員長をやっている」人物が、次のように発言している。「図書館が大量に購入するために、一般読者がもっぱら図書館で順番を待って、ただで借りる人が非常に増えている」「近ごろは街頭図書館というのがあって、八王子や町田で盛んで、トラックを4台くらい連ねてやってきて、そこで一月単位でどんどん貸し出ししている。これをやられると、どうしても一般書店での購入が非常に減ってくるという傾向がある。書店、取次、作家に影響が出る⁴⁾。「八王子や町田」で、「トラックを4台くらい連ねて」「一月単位でどんどん貸し出し」すという、実際には行われていない図書館の業務が、あたかも事実であるかのように、「公正取引委員会」の「著作物再販協議会」の場で、文藝家協会の「流通委員長」の発言として語られるのは、図書館界にとって大きな問題であろう。

他方、与那原恵（この記事での肩書きは「ノンフィクションライター」となっている）は、『論座』2004年2月号で、「多様な本との出会いの場を奪ってはな

らない 図書館は何のためにあるか」というタイトルの文章を発表している。図書館について考えるきっかけとして、三田誠広『図書館への私の提言』を読んだことをあげ、「公共貸与権」の導入、「複本」の制限、新刊書籍の貸出猶予、などの主張に対して、疑問を呈している。「私はものを書くとき、図書館の存在を抜きには考えられない。子供の頃から図書館の本を読んできたこともライターになった理由のひとつだ。そして今日、原稿や本を書くときに図書館の資料を多数読むし「本を書くのに図書館の資料は絶対に必要だった」とする。「現在活躍する作家たちも図書館のさまざまな本を読み今日に至るといふ人がほとんどのはずであろう」といふ⁵⁾。

少し角度は異なるが、c09. 金井 1947 は、小説の執筆に際しては、調べる必要がないので、「図書館を利用することがない」し、印税で生活しているので「読みたい本は」「買うのが」「業界の仁義」としながら、「図書館のすぐ隣か前か裏」に「住んでいる小学生だったら」「毎日図書館で本を借りて読む」のに、という⁶⁾。また、金井は別のエッセイで、文藝家協会の三田誠広などの見解に対して、売れない本でも「全国の図書館で二、三千部は買うし、赤字にはならない」との編集者の発言を紹介し、「図書館というのは少発行部数の作者にはありがたいものなのだ、まあ、思わされてきたわけなのだった」として、「私に言わせれば、『タダ』だからこそ、それでも読んでいただいてももらえることを有難いと思ったほうがいいんじゃないの?」とも述べている⁷⁾。

「はじめに」でとりあげたように、話題の「芥川賞」作家「綿矢りさ」は、図書館を利用してきたことを、インタビューで、再三、語っている。もちろん彼女がまだ高校生だった時期に「文藝賞」を受賞し、その後、現時点でも、早稲田大学の学生の身分であることも、その背景に存在していると思われる。しかし、こうした事実を、図書館がその存在をアピールするための素材として考えることはできないものだろうか。

東京の区立図書館の運営委託に反対する集會に、今回とりあげた『図書館の雑誌』の巻頭エッセイで、図書館のカウンターに配置される職員の対応の重要性を主張していた、53. 黒川 1961 を、講師として招いたことがある⁸⁾。このようなケースが他でも可能かどうかを検討してみる必要がある。

近年でも、「図書館へ行こう」といったテーマで特集記事を掲載している若者向けの文芸雑誌⁹⁾や地域文化雑誌が存在している¹⁰⁾。そうした中で、多様な利用

者が、制限をうけずに使える図書館のよさを、市民に対してアピールしていくことはもちろんだが、文芸関係者に対しても、図書館がわから、積極的に発言していくことの必要性を強く感じた。

注

1. はじめに——話題の「芥川賞」作家「綿矢りさ」と図書館のこと、など

1) 大森 望、豊崎由美『文学賞メッタ斬り!』PARCO 出版、2004、は「無数の文学賞を明快かつわかりやすく分類整理」(p. 4) することを目的とした出版物だが、「日本の文学新人賞といえば、まずは純文学新人賞の頂点にある芥川龍之介賞ですね」(p. 16) という、豊崎の発言から、本文がはじまっている。

また「大森 そろそろ第百三十回芥川賞の候補が決まっているはずなんだけど、『蹴りたい背中』がとらないかなあ」「豊崎 わたしもそう思います。これはデビュー作である文藝賞受賞作『インストール』(38回)より百倍出来がいいですよ。受賞からたった二年でよくここまで成長した、えらい!」(p. 27) と述べている部分がある。

今回の受賞時の状況については「文壇に異常事態 芥川賞贈呈式は厳戒 聖女作家綿矢りさ(20)に『悪質ストーカー』被害」『週刊ポスト』2004. 3. 12, pp. 40-43、のように、センセーショナルな反響を紹介した記事もみられる。

なお、綿矢りさに関する資料として、小谷野敦、渡部直巳、吉本謙次『綿矢りさのしくみ』太田出版、2004、が刊行されている。同書の帯には「100 万部小説『蹴りたい背中』と綿矢ワールドに関する、『ありそうでなかった』初の研究本! ファン&新世代小説家志望者必読」と記されている。

2) 綿矢りさ『蹴りたい背中』河出書房新社、2003

3) 綿矢りさ『インストール』河出書房新社、2001

4) 小日向健一、綿矢りさ「Internet Explorers 冒険者たち vol. 1 チャット・インタビュー 小説家 綿矢りさ氏」『図書館の学校』No. 027, 2002. 3, pp. 70-73

同じインタビューの中で、インターネットについては「受験のせいで高三になってから見なくなりました。でも高二のころは一日二時間半とか見てました」。「役立たず情報たっぷりの最先端情報公開機関! でもその嘘くさがが良し、と思っています」と語っている。

5) 綿矢りさ「著者インタビュー『インストール』」『文学界』2002. 2, pp. 296-298

6) 「作家の読書道 第8回: 綿矢りささん」

『WEB 本の雑誌』(<http://www.webdokusho.com/>)

冒頭の部分では「昨秋『インストール』で第38回文藝賞を受賞した、綿矢りささんです。最年少17歳での受賞、美少女作家誕生などなど、話題に事欠かない綿矢さんですが、果たしてその素顔は?」と紹介されている。本の読み方については「ほとんど家で読みますね。はじめは座って読んでますけど、だんだん腰が痛くなって、気づくと横になって読んでます。図書館で

借りた本が多いから、なくすのもこわいし、旅行にも持っていかない。良く読むのは特にテスト前。現実逃避なんですけど。それとテスト前はなぜか推理小説を良く読みますねえ。森博嗣さんとか、京極夏彦さんとか。『インストール』を書いたのも、そもそもテスト前の逃避したかった、というのがきっかけでした。でも気がつけば、その逃避の方が生活の中心になっちゃってましたね」としている。

また、最近では「香川県のタウン誌を書籍化したものがおもしろかった」と述べているが、これは、2004年度第90回全国図書館大会(香川県高松市)初日の講演者である「田尾和俊」が編集に関わっていた『タウン情報かがわ』(ホットカプセル)掲載の記事を単行本化した『笑いの文化人講座』シリーズ(ホットカプセル)のことと思われる。

また「作家の読書道 第30回」には、綿矢りさと同時に芥川賞を受賞した金原ひとみ(1983年生まれ)が登場している(彼女の父親は、翻訳を多数手がけ、現在は法政大学教授である金原瑞人(1953年生まれ)であることでも知られている)。なお、金原ひとみは、このインタビューで、図書館について言及していない。

7) 綿矢りさ「読書日記」『新刊展望』2003. 10, pp. 20-21

8) 山本文緒「薄情者『限りなく透明に近いブルー』村上龍(講談社文庫)」『日々是作文』文藝春秋, 2004, pp. 87-93

同書 pp. 317-318の「初出一覧」によると、初出は『オーパス』1993年頃

9) 高橋英夫「図書館とのつきあい」『本の引越し』筑摩書房, 2004, pp. 129-132

同書 pp. 194-195の「初出一覧」によると、初出は『経済往来』1986. 12

10) 金井美恵子「続・ヘトヘト日記」『目白雑録(ひびのあれこれ)』朝日新聞社, 2004, pp. 99-108

初出は『一冊の本』2003. 1, pp. 52-57

2. 雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析II

2-1 分析対象

1) 瀬名秀明「未来の『博士』たちの図書館」『図書館の学校』No. 017, 2001. 5, pp. 2-6

2) 宮沢章夫「魔物と旅に出る」『図書館の学校』No. 017, 2001. 5, pp. 8-13

3) 加藤郁乎「図書館への謝意」『図書館の学校』No. 018, 2001. 6, pp. 2-6

4) 青柳いづみこ「図書館で見たドビュッシーの素顔」『図書館の学校』No. 019, 2001. 7, pp. 2-6

5) 長澤 均「パソコンマニュアルよりもパソコン考古学を」『図書館の学校』No. 019, 2001. 7, pp. 8-9

6) 荻野アンナ「三つの対話」『図書館の学校』No. 020, 2001. 8, pp. 2-6

7) 柳父 章「図書館の思い出」『図書館の学校』No. 021, 2001. 9, pp. 2-6

8) 吉田直哉「もう少しオーラを」『図書館の学校』No. 022, 2001. 10, pp. 2-6

9) 目取真俊「原点としての場所」『図書館の学校』No.

023, 2001. 11, pp. 2-6

10) 草森紳一「『規則の寛大さ』について」『図書館の学校』No. 023, 2001. 11, pp. 7-11

11) 鳴海 風「サラリーマン作家の図書館利用法」『図書館の学校』No. 024, 2001. 12, pp. 2-6

12) 吉田秀和「図書館をめぐる三つのエピソード」『図書館の学校』No. 025, 2002. 1, pp. 2-7

13) 佐野真一「出版と図書館」(講演)『図書館の学校』No. 026, 2002. 2, pp. 2-14

14) 米原万里「ドラゴン・アレクサンドラの尋問」『図書館の学校』No. 027, 2002. 3, pp. 2-6

15) 笙野頼子「小説・S 倉極楽図書館」『図書館の学校』No. 027, 2002. 3, pp. 7-11

16) 堀江敏幸「此処に井戸水と葡萄酒があるよ」『図書館の学校』No. 028, 2002. 4, pp. 2-7

17) 浜田和幸「世界のヒーローたちと出会った米議会図書館」『図書館の学校』No. 028, 2002. 4, pp. 8-12

18) 鐸木能光「図書館が『本』の呪縛から解かれるとき」『図書館の学校』No. 029, 2002. 5, pp. 2-8

19) 平出 隆「わたくし図書館」『図書館の学校』No. 030, 2002. 6, pp. 2-6

20) 片岡直子「水曜日の図書館」『図書館の学校』No. 031, 2002. 7, pp. 2-6

21) 黒川 創「利用者への『壁』にならないカウンターを」『図書館の学校』No. 032, 2002. 8, pp. 2-6

22) 中上 紀「生きる糧が詰まった空間」『図書館の学校』No. 032, 2002. 8, pp. 7-11

23) 松山 巖「本たちの日常」『図書館の学校』No. 033, 2002. 9, pp. 2-6

24) 室井光広「〈本番〉の日々」『図書館の学校』No. 034, 2002. 10, pp. 2-6

25) 林あまり「びくびく」『図書館の学校』No. 035, 2002. 11, pp. 2-6

26) 菅 浩江「図書館という砦」『図書館の学校』No. 035, 2002. 11, pp. 7-11

27) 久世光彦「〈知〉の図書館」『図書館の学校』No. 036, 2002. 12, pp. 2-6

28) 野中 柊「自由の天地へのステーション」『図書館の学校』No. 036, 2002. 12, pp. 7-11

29) 三木 卓「学校図書館とわたし」『図書館の学校』No. 037, 2003. 1, pp. 2-6

30) 白石公子「背文字のポエジーとトイレと」『図書館の学校』No. 037, 2003. 1, pp. 7-11

31) 柴田元幸「幻想の図書館・現実の図書館」『図書館の学校』No. 038, 2003. 2, pp. 2-6

32) 中井久夫「図書館に馴染まざるの記」『図書館の学校』No. 038, 2003. 2, pp. 7-11

33) 日垣 隆「原稿料と印税の話」『図書館の学校』No. 039, 2003. 3, pp. 2-6

34) 常盤新平「ある図書館」『図書館の学校』No. 007, 2000. 7

35) 司 修「アトリエと本箱」『図書館の学校』No. 008, 2000. 8

36) 泉 麻人「永田町のタイムマシーン」『図書館の学

校』No. 009, 2000. 9

- 37) 町田 康「おくての俺」『図書館の学校』No. 010, 2000. 10
- 38) 柳瀬尚紀「インターネット図書館」『図書館の学校』No. 011, 2000. 11
- 39) 天沢退二郎「図書館って本当は何する所?」『図書館の学校』No. 012, 2000. 12
- 40) 多和田葉子「夜の図書館の顔」『図書館の学校』No. 015, 2001. 3
- 41) 陣野俊史「街の図書館の音源」『図書館の学校』No. 016, 2001. 4
- 42) 金井美恵子「発見の場として」『図書館の学校』No. 017, 2001. 5
- 43) 佐藤洋二郎「夏の約束」『図書館の学校』No. 021, 2001. 9
- 44) 海野 弘「リーディング・ビトウィーン・ザ・ライアンズ」『図書館の学校』No. 022, 2001. 10
- 45) 多田智満子「大学図書館にて」『図書館の学校』No. 024, 2001. 12

2-2 エッセイの概要

- 1) この文章は、2001年11月に開催された「図書館総合展」のプログラムのひとつで、「NPO 図書館の学校」主催による講演「出版と図書館」の抄録である。講演内容を記録したものであるため、他のエッセイが3,000~4,000字程度であるのに対して、文字数が4倍以上（約17,000字）になっている。
- 2) 佐野真一『だれが「本」を殺すのか』プレジデント社, 2001
佐野真一『だれが「本」を殺すのか 延長戦 (PART-2)』プレジデント社, 2002
- 3) 田井郁久雄「図書館は『本を殺している』か? 佐野真一氏の手法を批判する」『三角点』復刊4号, 2002. 9, pp. 5-13
- 4) ここで、「文京区大塚の都電すぐ近くの、中央図書館」とあるのは「都電荒川線」で、「大塚駅前」に隣接する「向原」に近い「豊島区立中央図書館：東池袋5-39-18」であると思われる。「地下鉄有楽町線要町駅」に近いのは「豊島区立池袋図書館：池袋3-29-10」である。
- 5) 泉 麻人「路線バスと地図と散歩が好きだ」『散歩学のススメ』マガジンハウス, 1993, pp. 187-193

3. 図書館はどうみられているか——図書館の「多様性」に関する見解を中心に

- 1) たとえば、手嶋孝典「クローズアップ現代『ベストセラーをめぐる攻防』を批判する NHKのお粗末な図書館認識」『ずぼん』No. 9, 2004. 4, pp. 86-109, では、この番組に対する詳細で実証的な反論がなされているが、「市区町村立図書館が分野による特化（分担収集）を始めたら、図書館の魅力は半減してしまう」と述べられている。さらに都立図書館の機能分担の実例を紹介し、「市区町村立図書館への『貸し渋り』も始まっている。分担収集は、新たな図書館サービスを展開する

ための手段とはならず、むしろ都道府県立図書館の後退の第一歩であるとさえ言えよう」(p. 94)と批判している。

- 2) 佐藤洋二郎「福猫小判夏まつり」『福猫小判夏まつり』講談社, 2003, pp. 29-110
同書巻末の「初出」によると、初出は、『文學界』2001. 3

西武池袋線「中村橋駅」近く「午後の図書館は、静かだった」とされる施設を、会社を辞め、家族とも別れて、「貸しビルの夜警」「日給月給の臨時社員」をしている中年男性が、平日の昼間に訪れる場面が描かれている。「本棚の奥にソファがあり、そこに近づくと満席で男たちが新聞や雑誌に視線を落としている」。その利用者たちは、「半ズボンにサンダル履きで濃い脛毛を見せている者。腕組みをし目を閉じている者。館内を所在なげに見つめている者」「誰もが時間を持て余しているように見えた」。この中年男性は、「気がむけばあちこちの図書館に入るが、昼間はどこでも年配の男たちが増えた。調べものをしている様子でもない。本を読もうという姿勢でもない。静かで落ち着ける場所を求めているという様子だ。彼らは誰とも口をきかずぼんやりとしているが、あれは不景気で解雇になった人間たちではないのか」と描写されている。彼は「はじめのうちこそ場違いなところにきていると気後れしたが、近頃は自分とよく似た者がいるとおもうとかえって心落ち着くものがあった」と感じている。「中村橋」のことを調べようと「社会科学図書や文学全集のそばに地元資料コーナー」がある場所へ行く。練馬区役所に電話をかけ、西武鉄道にきいてみてはどうかといわれて「貸し出しカウンターにある鉛筆とリクエストカードを取り」連絡先の電話番号をメモしているシーンがある。

なお、現実には、西武池袋線「中村橋駅」近くには、「練馬区立貫井図書館：練馬区貫井1-36-16」が実在する。

4. おわりに

- 1) 佐藤洋二郎「夏の約束」『図書館の学校』No. 021, 2001. 9

千葉ニュータウンは複数の自治体にまたがっている。白井市に「白井市立図書館」、印西市の「千葉ニュータウン中央駅」近くに「印西市立小倉台図書館」、印西牧原駅近くに「印西市立そうふけ図書館」、印旛村に「印旛村立図書館」がある。他に、船橋市、本埜村、の一部もニュータウンに含まれている。

なお、同じ著者の別のエッセイにも「暇つぶしによく図書館に行く。特によく行くのは、千葉ニュータウンの白井町立図書館と浦安図書館だ」「以前、労働意欲がまったくなくなり、生活が困窮していた頃、近くの図書館によく通った」という記述がある（白井市の制定は2001（平成13）年4月～）。出典は、次のとおり。

佐藤洋二郎「蜘蛛の巣と蟬」『息子の名は濯』三一書房, 1997, pp. 96-97

同書 pp. 207-210の「初出一覧」によると、初出は

『読書人』1995. 11. 24

また、この本には、別に、次のエッセイが収録されている。

佐藤洋二郎「図書館の裏側」『息子の名は濯』三一書房、1997, pp. 104-106

同書 pp. 207-210の「初出一覧」によると、初出は『日本経済新聞』1997. 3. 26夕刊

「縁があって桶川図書館長の石田利夫さんとお酒をご一緒した。「わたしたちは市の財政を預かって、少しでもいい本を提供したいと思っているんです、と石田さんは酒を酌み交わしながら言われた。「子供が読んだ本を重そうに持ってきたり、目の悪い老人が虫眼鏡を当て、何日もかかって読んだものを返しにきたときには、つくづく図書館員になってよかったと思うし、つい声をかけてしまいたくなるんですよと彼は言った。

- 2) 海野 弘「図書館を旅する喜び」『書齋の博物誌 作家のいる風景』PHP 研究所、1994, pp. 124-127

同書巻末の「初出一覧」によると、初出は、『THE GOLD』(JCB)、1988. 5

この文中で「丸亀市の図書館」が「一週間に二日も休んでしまう」と書かれているが、現在、丸亀市立図書館のホームページの「図書館利用案内」で、「休館日」は「毎週月曜日・毎月末日・祝日・年末年始(12月28日~1月5日)・図書の整理期間(9月28日~9月30日、3月29日~3月30日)」とされている。

- 3) ここでは、『出版ニュース』2004. 8月上旬, pp. 17-27, に掲載されたものを参照した。

- 4) 日本文藝家協会のホームページで公開された、2003. 3. 20現在の理事・委員会の名簿によると、「書籍流通問題委員会」の委員長は、深田祐介である。

本稿の前著「現代日本の文芸関係者のもつ図書館観の一面」でとりあげた「図書館は無料貸本屋か ベストセラーの『ただよみ』機関では本末転倒だ」『文藝春秋』2000. 12, pp. 294-302, の著者、林望(『図書館の学校』No. 001, 2000. 1, に掲載された講演の演者)は、この委員会の委員のひとりであり、林の存在がこうした場での深田委員長の発言に影響を与えていることが考えられる。他の委員は、大岡玲、出久根達郎(『図書館の学校』No. 002, 2000. 2, 巻頭エッセイの著者)、辻井喬、中沢けい。なお、2004年の名簿には、理事・常務理事などが記されているのみで、委員長・委員会メンバーは、記載されていない。

また、文藝家協会理事のひとり、NHKのテレビ番組「ベストセラーをめぐる攻防 作家 vs 図書館」(NHK『クローズアップ現代』2002年11月7日放送)にも出演していた、井上ひさしの脚本『父と暮らせば』を映画化したものが、2004年夏に公開されている。

図書館に勤めているという設定のヒロインを演じるのは、宮沢りえ。

「見もの聞きものシネマチャート」『週刊文春』2004. 8. 12・19, p. 160, によれば、「一九九四年に初演された井上ひさし作の二人芝居の映画化」であり、「広島に原爆が落とされてから三年後。図書館に勤めている美津

江(宮沢りえ)が自宅に帰ると押入れの中から父竹造(原田芳雄)が現れる。竹造は三年前の原爆で死んだ。が、娘の幸せが気になって、この世に戻ってきたのだ。図書館に来る木下(浅野忠信)は美津江が好きらしい」というストーリーである。

オリジナルの脚本は、井上ひさし『父と暮らせば』新潮社、1998(初出は『新潮』1994. 10), として刊行されている。同書の巻末(p. 114)「主要参考資料」には、広島市立浅野図書館編集発行『広島市立浅野図書館略年表』が、あげられている。

また、雑誌『シナリオ』には、映画のシナリオが掲載されており、回想シーンに図書館での場面が存在する。出典は、次のとおり。

黒木和雄、池田真也「父と暮らせば」『シナリオ』2004. 9, pp. 21-45

- 5) 与那原恵「多様な本との出会いの場を奪ってはならない 図書館は何のためにあるか」『論座』2004. 2, pp. 244-249

この文中で紹介されている、三田誠広『図書館への私の提言』勁草書房、2003, を「図書館側からデータをもとに否定」したものは、次の論文である。

田井郁久雄「『図書館への私の提言』への提言」『出版ニュース』2003. 11月下旬, pp. 6-16(『三角点』復刊8号より転載)

また、日本図書館協会と日本書籍協会が共同で実施した「公立図書館貸出実態調査」の結果は、『公立図書館貸出実態調査2003報告書 平成16年3月』として、日本図書館協会のホームページ(<http://www.jla.or.jp>)に公開されている。

なお、与那原の文章がこのような内容のものになっていることは、「ライターになる以前の一九八一年から六年間ほど公共図書館に勤務していたことがある」という経歴にも関係していると思われる。

- 6) 金井美恵子「発見の場として」『図書館の学校』No. 017, 2001. 5

- 7) 金井美恵子「続・ヘトヘト日記」『目白雑録(ひびのあれこれ)』朝日新聞社、2004, pp. 99-108

初出は『一冊の本』2003. 1, pp. 52-57

- 8) 「東京の図書館をもっとよくする会」主催により、2003年2月15日に、文京区民センターで開催された「やってはいけない! 図書館の“委託”——安がりでない、本物の図書館を! ——」で、黒川創は、「カウンターはすべての図書館の窓口」という講演を行っている。

- 9) 「特集 決定版! 遊べる図書館ガイド」『recoreco レコレコ』2003. 9-10, pp. 6-24

この雑誌は「本と書店で遊ぶレコメンデーションブック」と表紙にある。

特集記事では、「現代マンガ図書館」「アカデミーヒルズ六本木ライブラリー」「岐阜県図書館」など、「私設の専門図書館・図書室」「公立の図書館・図書室」「ショップを兼ねたライブラリースペース」をあわせて30館あまり紹介している。

また「図書館のある風景 映画編」として、『ティファニーで朝食を』から『ハリー・ポッター』まで

図書館がキーワードとなる映画」を30編あまりピックアップして、簡単に紹介している。邦画では『ガス人間第一号』（1960）、『赤い殺意』（1964）、『耳をすませば』（1995）、『Love Letter』（1995）がとりあげられている。

さらに、以下のような、図書館に関するエッセイ（すべて700字程度）が掲載されている。

堀江敏幸「読書館を求む」

澤野雅樹「図書館が嫌いな理由、もしくは大音量図書館の構想…」

リリー・フランキー「図書館イリュージョン」

藤野千夜「公立図書館の思い出」

安西水丸「ぼくと図書館」

なお、特集とは別に、この雑誌には「厳選！秋の夕暮れに読みたい本136冊」というタイトルで、それぞれのテーマごとにブックガイドが掲載されているが、そのテーマのひとつは次のような内容のものである。

山岸清太郎「図書館でドラマにめぐりあうために」『recoreco レコレコ』2003. 9-10, pp. 99-101

ここでは、「図書館のドラマには、大きく分けて2種類ある」として、1冊の本との出会いと、もうひとつは「たとえば眼鏡の似合うセクシーな司書のお姉さんがいたりして、その司書さん目当てに毎日図書館通いをしている」「とか何とか、そういう方面のドラマである」という。

本文中で紹介されている図書は、以下の7冊。

小田光男『図書館逍遥』編書房、2001

井上ひさし『本の運命』文藝春秋、2000

毎日ムック・アミューズ編『おもしろ図書館で遊ぶ 専門図書館142館完全ガイドブック』毎日新聞社、2003

堀田 穰『図書館のある都市へ』鹿砦社、2000

「まちの図書館でしらべる」編集委員会編『まちの図書館でしらべる』柏書房、2002

リチャード・ブローディガン『愛のゆくえ』早川書房、2002

恩田 陸『麦の海に沈む果実』講談社、2000

10) 「特集 図書館へ行こう！」『大阪人』2004. 3, pp. 6-48

この雑誌は「『大阪人も知らない大阪』発見 Magazine」と表紙にある。

特集では、「大阪市立中央図書館」「大阪府立中之島図書館」の所蔵する貴重書コレクションの一部を、カラーページで公開している。また、「図書館活用スーパーテクニック」「知識のジャングル探検」では、文章とイラストで、図書館員の専門性や「レファレンスサービス」について説明している。さらに「専門図書館を歩く」では、「国立国会図書館関西館」「味の素 食のライブラリー」など、10館あまりの大阪周辺の専門図書館を、カラー写真とコメント、開館時間などの案内、周辺の交通機関と略図、などによって紹介している。